初-中級移行過程における語彙教育

森　田　良　行

1. はじめに

語学教育では，学習の水準に応じて初級・中級・上級と三つの段階に分けて教育を施すのが一般である。この三つの段階の違いは，授業時間数，教科書や教材，クラス編成，授業形態の差として現れるだけでなく，学習内容の質的な面でも相違する。この点に関しては本誌21分冊の拙稿で扱ったので，ここでは触れない。

日本語教育の課程が質的に差のある「初―中―上」の3段階に分かれているとすれば，初級から中級へ，中級から上級への各段階への移行過程では，教育上何らかの手当てを施さなければ十分な教育効果を挙げることは期待できないであろう。そのことを理解して確実に学習者をリードしていくためには，まず各段階の移行過程における教育内容および質の違いを教師側が正しく理解し押さえておくことが求められる。そこで本稿では，特に問題の多い「初級―中級」段階の移行過程における諸問題を，語彙の面から取り上げて，注意を換起したい。

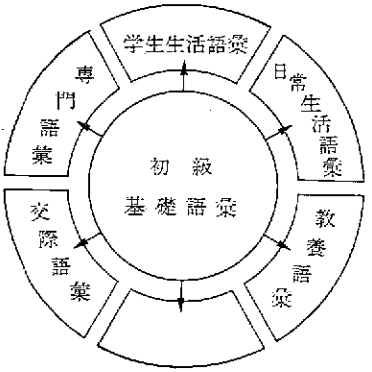
2. 初級と中級との差

初級から中級への移行は，一般に考えられているような穏やかなスロープ状のものではない。階段状にアップする。それは教育の内容と質との差によるのであるが，このことを心得ていないで，いたずらに初級と同じ方式でそのまま中級へと，なだらかに続く教科書が無いのを嘆くのは，いかがなものであろうか。初級では，最も基礎的なところを人為的に抜き出し

組織化し，集中的に学ぶ。一方，中級では現実の言語生活での一般的言語事象の基本的な部分のみを学んでいく。これを食事にたとえるなら，初級は入門期の母乳から離乳食への時代，中級は日常の家庭料理へと移行しそれに慣れる時代と言えよう。これを教科書編纂の側から言えば，初級教材は，日本語の模型として作為によって作文され，収録する語彙や文法事項は，初級語彙・初級文法の体系化のための人為的選択が施される。そして，基本文型を中心に組み立てられた文レベルの口頭言語を順次学習していく。一方，中級教材は書記言語・文章表現を中心に学習が進められ，収録語彙や文法事項も現実の言語生活において用いられる基本的なものは出来るだけ網羅し，たとえ初級と同じものがあったとしても，中級的な用い方として繰り返し学習させる。つまり基本的な意味・用法は初級段階で，周辺的な用法は中級もしくは上級回しというわけである。

ところで，一般に初級段階で与える語彙数は 1,000 から 1,500 語ぐらい，多くても 2,000 語どまりであろう。(注，早大初級教科書に収められている全語彙数は 2,105 語。) 中級段階ではさらに 2,000 語から 3,000 語ぐらい増やすわけであるから，合計 3～4 千語といったところが中級終了段階の学習語彙量ということになる。これを日本人一般の場合と比較すると，高校を修了して大学生になる年齢層では，平均 4 万語以上の語彙量を持つと言われる。国研の語彙調査でも，新聞の 38,395 語 (昭和 41 年)，雑誌の 30,331 語 (昭和 31 年) であるから，新聞や雑誌を自由に読みこなせるようになるためには，つまり通常の成人の日本語力並みとなるためには，少なくとも 3 万語ぐらいに理解語彙となっていなくてはならない。これを中級終了段階の学習語彙数と比較すると，通常日本人の 1 割程度の語彙数しか学んでいないということになる。これは学習に当て得る時間と記憶可能語数との両者から導かれる結果である。初～中級学習で一般日本語の約 1 割に当たる語数をしぼって与えるとなると，当然のことながらそこに語彙選択が行われる。初級では，これからの語彙教育の基礎となる，表現や理解のために欠くことの出来ない，日本語語彙体系の中核部分を占め

る 1,000～1,500 語ほどの基礎語を与える。いわば人為的に選び抜かれた語彙のエッセンス，先のたとえで言えば，母乳と離乳食に当たる語を集中的に与える。一方，中級段階では，この基礎的な 1,500 語ほどの語群を核にして，実際の言語生活や言語活動に必要な語彙，それも頻出度の高いもの(いわゆる基本語)を選んで与えていく。初級段階と違って，これからの学習効果を考えた，派生的に語数を増やせる基となる語にしぼっていくわけではない。実際の言語生活での必要語彙を増やしていくのであるから，語彙選択の基準は頻出度の多寡により，語同士が形態的あるいは意味的に関連がなくとも，その言語分野での必要語彙ならどんどん与えていく。これは次の上級段階へと進む過渡的段階であるから，ある程度専門化したそれぞれの分野ごとの基本となる語彙を与えなければならない。食物の例でたとえるなら，家庭料理に慣れるとともに，洋食，中華料理，郷土料理，携帯食，...と細分化した食生活に対応できるよう慣らしていく時期が中級段階である。留学生の場合，日本での日常生活と並行して，学生生活，専門研究等をも進めるのであるから，それらに必要な日本語能力の習得が当然要求される。語彙の面でもこれを反映して，日常の生活語彙，学生生活語彙，専門語彙，成人としての教養語彙，日本人学生との交際語彙，...等が個々に要求され，それを日本語教育の場で考慮しなければならないのである。さらに上級になれば，完全に学習者の専門別に与えるべき語彙の分野が分かれていく。これを図で示せば左のようになるであろう。



初級で与える語彙は，学習の基礎語彙としてどの学習者にも共通のものであるが，中級段階ではそれぞれの目的に見合った分野の生活語彙や，専門課程に入る予備段階としての学習語彙を選んで配合していく。技術研修のためならその分野のもの

を早めに与えねばならぬし，翻訳者や通訳養成なら，その任務の方面の語彙を，大学院生なら，理工系か社会科学系か文科系かで上級段階でクラスが分かれるのであるから，それへのステップとして中級段階でもある程度のものをアレンジしていく匙加減が要求される。と同時に，大学生としての必要語彙，校内生活や学友との社交のための語彙も覚えていかなければならないのである。このように中級段階には，初級と違った目標と能力とが要求されるので，初級から中級への移行期には，この異質の学習内容にスムーズに移れるような細かい配慮がなされている。ここでは語彙学習の面に関して，早稲田大学の教科書でどのようにそれがなされているかを，章を改めて見ていくことにする。

3. 初―中移行期における語彙教育の特色

日本語の語彙を語種の面から眺めると，和語・漢語・洋語(外来語)の 3 種から成ることはつとに言われていることである。これを日本語教育の立場で考えると，初級語彙は基礎的な和語中心，中級語彙は派生的な和語に加えて漢語の増加をはかる。そして上級に至って一般成人向け日本語もしくは専門分野における日本語と同じとするために，上級漢語や複合漢語が加わっていく。初級は話しことば中心であり，基礎語が多いため，必然的に和語の占める比率が高まる。中級は書きことばへと移行していくため，漢語の増加が著しい。漢字学習の進行がこれに拍車をかける。初級が表現語彙の増加を目ざしたのに対し，読み・書きに重点の移る中級では書きことば語彙が増え，その結果，理解語彙の割合が急速に増す。上級に至って目で見て解釈できるならそれでよいとする理解語彙の数がますます多くなる。これは習得漢字の数の増加がそれを可能にしていると見てよかろう。次に，以上のことを初―中の移行過程に限って見ていくことにする。資料として早稲田大学における初級教科書の終わりの 10 課 (31～40 課) に出てくる新出漢語および新出和語の一部を使用する。まず次の資料に目を通されたい。

31課　方　言(会話)

転勤，出身，上京する，苦労する，将来，専攻する，先輩 / 名古屋弁，標準語，卒業後，博士課程，古典文学，修士論文，指導教授，入学試験 / よく当たりましたね

32課　趣　　味(会話)

規則を覚える，実際にやる，相談する，趣味，日本の文化，よく理解する，必要 / 月・水・金 / うまくなる，ほかの日，つごうが悪い，いちばんいい，さしつかえがない，うらやましがる，お茶をたてる，花をいける

33課　す　も　う(会話)

めんどうです，それ以外の時，勝負，地位が上がる，逆に下がる，本物の試合 / 日にち / きびしい世界

34課　研究会の相談(会議形式)

変更する，交渉する，概論，議長，賛成，反対，多数決 / 古典文学研究会，月・水・金 / 次は来週の水曜でいいですか，いちばんいい，たいへんありがたい，けっこうです，古典を読みたいなら手伝うよ，まとめて注文する，めいめいで買う，作品を取り上げる，決をとる

35課　レポート(文章，説明文，箇条書きを含む)

箇条書き，健康，都市，発達，消防，計画，交通，混乱する / 近代都市，諸問題，十枚程度，新聞記事，生活環境，暖房用，工業用，地下水の取りすぎ，交通機関，都市化，人口密度，具体的に論ずる / 土地が沈む，発達に対して遅れている，住宅が集まる，密度が高くなる，問題を明らかにする

36課　お　祭　り(文章，論説文)

感謝する，宗教が存在する，最近の調査，信仰，特定の宗教，信者の人，影響する，仏教の形式 / 農産物，無宗教，宗教的な習慣 / かついで回る，たいへんな人出，信仰を持つ，全部捨てる，生活に溶け込む，結婚式をあげる，お経をあげる

37課　日　記(日記体)

起床，現代，社会，思想，講演，意見，家庭，理解，～世紀，文化，当時，解説，留学 / 東北地方，日本歴史，社会構造，座談会，進歩的，中心地，伝統的，時刻表，一日じゅう / 家庭の姿，いい勉強になる，やっと晴れそうだ

38課　手　紙(書簡体・敬語文)

経験，上京なさる，正確な日本語，ご報告 / お変わりございませんか，よろしくお伝えください，おかげで上達いたしました，苦手，くれぐれもたいせつに

39課　訪　問(会話，依頼スタイル，敬語文)

就職，訪問する / 建築関係，建築会社，紹介状 / いろいろとたいへんでしょう，なにぶん，かってなお願い

40課　日本語の学習(文章，感想文，論説スタイル)

上達する，有効に，時間を利用する，完全に身につく，割合かんたんに覚えられる / 日常生活，国語辞典，不自由，代表的 / 文字を使い分ける，まだまだ勉強することがたくさんある / そらで書ける，漢字とまぜて用い，ずいぶん違った書き方，現代語の発音に近い，もっともやさしい単語なら．．．，うかうかしてはいられない / 耳で聞いたことば / 油断大敵

中級1課　校内案内(会話)

構内，完成した，演習，本部，教務，庶務，人事，経理，正式，名称，書籍，衣類，市価，経営する，自由，施設 / 和漢洋あわせて百万冊，語研，社研，生協 / 校内案内，案内板，現在地，創立以来，近代的な建物，研究室，大学本部，各学部，何号館，生活協同組合，学用品，電気器具，運動用具，学生生活，運動場，案内図 / 丸じるしのところ，おちついた建物，この図ではここのところに当たります，大学のまわりにある食堂，少し離れたところ，少しあるいてみましょう，いかにも大学の図書館らしい建物，たいしたものですね，学用品はも

ちろん，机，書だな．．．，その点まったく自由ですね，いこいの場

次に，ここに掲げた各課の語彙に，初―中級移行過程における語彙教育がどのように反映しているか，順を追って見ていくことにする。

（1） 漢語の増加

一見してわかるように，中級1課では，それまでの初級にくらべて漢語の数が急増する。文型や文法事項の面では，中級の初めの数課はむしろ初級の終わりごろよりやさしい。それまで学習した初級文型・初級文法の総復習として新しい事項は避け，むしろ使用語彙の面で初級で出て来なかったものをどんどん与えて自在な会話力と速読力をつけていく。中級クラスは，他の教科書で学習してきた者，自国で学習してきた者など，前歴の異なる学習者の寄り合いであることが多いという性格も，このように文法事項は総復習にして，新しい語彙で応用力を試すという授業の進め方になるのである。その結果，非基本語彙の漸増と抽象語の増加を引き起こす。「本部，教務，庶務，人事，経理，．．．」といった不必要とも思われる語が1課からさっそく飛び出すが，これは要記憶語彙ではなくて，特異な新出語に出くわしたとき自力で解決する訓練のためのもので，その文脈内で理解へと漕ぎつけさえすればよい。初級では表現語彙としてぜひ身につけておきたいものを，中級ではそれに理解語彙が加わって語彙数の増加をはかる。したがって，初級と同じ観点で新出語を扱おうとすると，どうしても無理が生ずるのである。

（2） 複合語の増加

課の進行とともに語彙数が増えるのは当然のことであるが，全く新しい語が加わっていくだけでなく，中級では既習単語の組み合わせによる複合語（合成語）の増加も見逃がせない。そこで，その準備段階として初級後半の課では，ごく僅かではあるが複合語を出して慣れさせておく。造語法をさりげなく知らせて，中級以後，新出複合語に出会った際に自力で理解語彙とすることができる能力を養っておくのである。先の資料では，複合和

語としては

取り上げる (34)，取りすぎ (35)，溶け込む (36)，使い分ける (40)

などが見られるが数は少ない。(カッコ内数字は第何課であるかを表す。)「一あげる / 一すぎ / 一こむ / 一わける」といった複合成分を学ぶと同時に，「取りすぎ / 働きすぎ / 食べすぎ / 飲みすぎ / 遊びすぎ . . .」「溶け込む / しみ込む / 飲み込む / 取り込む . . .」など関連して理解語彙数をふやすことにも心を致す。

(3) 複合漢字熟語の増加

漢語は2字熟語が最も多いが，それにさらに1字の造語成分が前か後ろに付いたり，2字熟語同士が結合して4字熟語を造ったりする。中級段階では，第1課を見てもわかるように，漢語の増加が特徴的で，いかに漢語を理解語彙としていくかが問題となる。(特に非漢字系学習者に対して)これは漢字教育と密接な関係を持ち，個々の文字の訓を知ることにより音読できなくとも理解可能な語となる。理解語彙が表現語彙を大幅に上回る増加率となるが，これは中級教材が漢語の頻出度の高いことによる。もちろん，読み教材として書きことば中心となるため，文章語の特徴として漢語の使用率が高いのは当然である。漢語の語構成を知り，自力で理解できる力を養成するため，初級の後半になると漢語を意識的に増やす。しかも，物質名詞でなく，抽象名詞やサ変動詞の語幹となる語が増えるので，それなりの対応方法を考えなければならない。たとえば初級35課で見ると，複合漢語として

近代都市，十枚程度，新聞記事，生活環境，交通機関，人口密度

等を出し，熟語の造語形式に慣れさせるとともに，「近代都市，古代都市，工業都市，商業都市 . . .」のように連想によって連鎖的に関連語を体系的に増やす練習もする。また，

諸問題，暖房用，工業用，都市化，具体的

のような1字の造語要素も，用じ方式で語彙を増やすよい練習台となるであろう。「地下水」のように，和語「みず」から類推でき，「水」の2次語

造りという面で応用力を身につけさせる素材となる。概して漢語の多い文章は抽象度の高い論説調となるため，このような文体に慣れさせることも，中級への橋渡しとして大切である。

（4） 省略形の理解

和語もまれに省略形を造るが，漢語はその傾向が著しい。「高校」などむしろ省略形で覚える。中級1課では

生協（生活協同組合），語研（語学教育研究所）

のような特殊なものから，さらには「和漢洋あわせて百万冊」のような表現を積極的に出しているが，それに先立って，初級でも「月，水，金」(32, 34課）のような形で再度出しているのである。

（5） 派生義の獲得

中級では語彙の増加と並行して，既習語彙でも初級で学んだ基本義とは違った派生的な意味を，いわゆる転義ないしは派生義を学ぶ。中級1課で見るなら，地理的な場所でない「丸じるしのところ」(箇所の意）や，'相当する'の意味で「ではここのところに当たります」など，また，同じ「少し」でも場面的な「少し離れたところ」と時間的な「少しあるいてみましょう」など，意図的にこのような使い方を提示する。その伏線として初級の終わりでも，派生義をぽつぽつ与えていく。

「よく当たりましたね」(31)，「たいへんな人出」(36)，「現代語の発音に近い」(40)，「そらで書ける」(40)

など例は多い。同じ「よく」でも「よく当たりましたね」(31)，「よく理解する」(32) のように'うまく''上手に'の意と'十分に'の意とを続けて出し，一方で「いちばんいい」(32) のような本義'良い'と比較させるといった具合である。文脈からそこに用いられている語の意味をとらえる練習を日ごろ十分におこなっておく。

（6） 比喩的用法の習得

意味の転用として，本来結び付かない事物に対して比喩的にその語を用いることがある。比喩的用法である。中級1課で見ると，人間に対して用

いる「おちつく」をモノへと転用して「おちついた建物」のように用いる類である。初級でも終わりごろでは，このような比喩的用法を少しずつ示しておく。

「土地が沈む」(35),「発達に対して遅れている」(35),「住宅が集まる」(35),「密度が高くなる」(35),「信仰を持つ」(36),「生活に溶け込む」(36),「家庭の姿」(37)

などが見られる。

（7） 慣用的用法の習得

中・上級での慣用句・慣用表現学習の布石として，初級でも少しずつこのような例を出しておく。ことばの組み合わせとして覚えさせるのである。

「さしつかえがない」(32),「お茶をたてる」(32),「花をいける」(32),「決をとる」(34),「結婚式をあげる」(36),「お経をあげる」(36),「完全に身につく」(40) など。

（8） 類義語の使い分け

語彙の増加にともなって類義の語が増えてくる。その意味・用法の差を知り，表現語彙として正しい日本語を身につけていくのも中・上級段階である。中級1課で「創立以来」とあれば当然，初級の「卒業後」(31) を思い出し，その違いを考える。「めいめいで買う」(34) では「それぞれ」との対比をし，その後出てくるであろう「おのおの」への伏線として類義語を学習していく。「やっと晴れそうだ」(37) では「ようやく」と比べるといった具合にである。

（9） 字義を超えた語義理解

ことばは時としてその文字の表す意味を超えた，文中・句中での意味，あるいは語の組み合わせの中で生ずる特別の意味を表すことがある。中・上級では，このような文脈的意味や熟語構成によって生ずる意味を出来るだけ多く身につけさす。その手初めに中級1課でも

「いかにも図書館らしい建物」「学用品はもちろん，机，言だな．．．」

などが顔を出す。「いかにも A らしい B」「A はもちろん B も」という

文型の中ではじめて，この「らしい」や「もちろん」の意味がはっきりしてくる。初級でも「耳で聞いたことば」(40) が持つ意味は，「耳」や「聞く」がわかっていても理解できるわけではない。「目で見たことば」との対比のうえで意味がはっきりしてくる。その他「油断大敵」(40) など，漢語の特殊な熟語も，それぞれの漢字を知っていても全体の意味はつかめない。このような上級的な語彙学習も初―中級移行過程からぼつぼつ与えておくのである。

語彙教育は，初級・中級・上級とはっきり区別するべきものではない。これは初級語彙だ，中級語彙だ，いやこれは上級語彙だと弁別するところから，本来この3段階は截然と分かれるように思われがちであるが，以上見てきたように，語彙のふるい分けと語彙教育で扱う内容とは全く別の事柄で，教育面からはこの3段階はむしろ連続的で，その移行過程では重複するように橋渡しをしなければならないのである。同じ語でも本義と派生義，基本用法と比喩的用法というように，幾度でもくり返し初―中―上の一貫教育の中で与えられるべきなのである。その点から，語彙教育は一種の螺旋階段的に何度も同じ語に立ち返りながら上へ上へと昇っていくものであることを忘れてはならない。